

## 紫式部集注釈不審の条々 (二)

An Interpretation of "Murasakishikibushu"(2)

工藤 重矩

Shigenori KUDO

(国語教育講座)

(平成十八年九月一日受理)

### 一 はじめに

紫式部集の和歌について、これまでの解釈のうち誤りと考えられるものの四首を取り上げて検討を加える。これまでに紫式部集の解釈については四編の拙論を発表してきた<sup>注</sup>。本稿もその趣旨、家集を紫式部の伝記資料として利用する前に和歌として精確に解釈すること、岩波新書で形成された先入観を取り去って解釈すること、これらの趣旨は同じである。

紫式部集本文は実践女子大学本(実践女子大学文学資料研究所年報第一号の翻刻。歌番号は新編国歌大観)による。陽明文庫本は笠間書院影印叢書により、その他、南波浩『紫式部集の研究 校異篇伝本研究篇』(笠間書院)を参考にした。注釈書・伝記等は左記により、引用のさいの書名は括弧内の略称による。これ以外の引用はそのつど記す。

今井源衛『紫式部』人物叢書。昭和四一年。(『人物叢書』)

清水好子『紫式部』岩波新書。昭和四八年。(『岩波新書』)

南波浩『紫式部集』岩波文庫。昭和四八年。(『岩波文庫』)

竹内美千代『紫式部集評釈 改訂版』桜楓社。昭和五一年。

(『評釈』)

山本利達『新潮日本古典集成』新潮社。昭和五五年。(『古典集成』)

木船重昭『紫式部集の解釈と論考』笠間書院。昭和五六年。

(『解釈と論考』)

學燈社『國文學』昭和五七年一〇月号。(『国文学』)

南波浩『紫式部集全評釈』笠間書院。昭和五八年。(『全評釈』)

伊藤博『新日本古典文学大系』岩波書店。平成元年。(『新大系』)

中周子『和歌文学大系』明治書院。平成十二年。(『和歌大系』)

### 二 一〇二番—弁解の掛詞

中将せうしやうと名ある人々のおなしほそとのにすみて少将の

きをよなくあひつゝかたらふをきゝとなりの中将  
みかさ山おなしふもとをさしわきてかすみにたにのへたてつるかな  
返し

さしこえていることかたみゝかさ山かすみふきとく風をこそまで

(一〇一・一〇二)

## 1 問題点

この贈答歌の解釈における疑問点は返歌の「さしこえて」にある。

まずは詠歌の事情を見る。中将、少将という名をもつ女房が同じ細殿に局していた。紫式部は少将の君を毎夜訪れては語らいあっていた。それを隣の局にいる中将が聞いて、「みかさ山」の歌を贈ってきたのである。

「みかさ山」の歌の歌意は「三笠山の同じ麓なのに区別して、霞に谷が隔てられたことです。中将も少将も同じ近衛府の仲間なのに、あなたにわけへだてをされましたよ。」(古典集成)で大きな問題はない。三笠山は近衛府の異称。女房である中将・少将の名にちなんで用いていることも全ての注釈に指摘されるとおりである。小さな問題としては、「霞に谷の隔てけるかな」の部分、陽明文庫本では「かすみにたにのへだつる哉」とあること、注釈書によっては霞と谷の比喩の当て方に相違があること等があるが、いまは触れない。

さて返歌の歌意は、例えば『古典集成』は

霞の覆った谷を越えて三笠山に入っていくことは困難なので、風が霞を吹き散らすのを、あなたが打解けて下さるのを私の方こそ待っているのですが。

と口語訳し、「あなたの方が霞で、私を隔てているのだ、あなたの心が解けたら、私は親しくなれる、との返歌である。」と説明している。

「さしこえて入ることかたみ」について、諸注とも「谷を越えて」「踏み越えて」と解釈している。「さし越えて」の意味は、霞の谷を越えての意でよいのだが、返歌の技法として最も重要なことは、〈少将を跳び越えて直ちに中将の許に行くのは困難〉という弁解であることを指摘しなければならない。諸注これを指摘するものがない。

『評釈』と『解釈と論考』は「さしこみて」の本文を採用し、霞が立ちこめて(評釈)、局に閉じこもって(解釈)と解している。後述のとおり、その本文は誤りなので、このことについては詳述しない。

## 2 「さしこえて」の語義

『全評釈』は「さし越えて」の語釈に「踏み越えて。」と釈し、用例として源氏物語・東屋の、少将が常陸介の実子である次女に乗り換えたのを浮舟の母(常陸介の北の方)が歎く場面を引用している。

親なしと聞きあなづりて、まだ幼くなりあはぬ人を、さし越えてか  
くはいひなるべしや。(新編全集 六・三四頁)

これは年上の浮舟を跳び越して、年下の「まだ幼くなりあはぬ」次女に乗り換えたことを「さし越えて」と表現している。紫式部集のこの歌の「さし越えて」の参考例として適切な例であるが、残念なことに『全評釈』はその意味するところを見逃している。同様の例を挙げる。

・(上略) おほけなく 上つ枝をば さし越えて 花咲く春の 宮人  
となりにし時は (下略) (拾遺集五七四・藤原兼家)

・今参りのさし越えて、物知り顔に教へやうなること言ひ、後見たる、

いとにくし。

(枕草子「にくきもの」)

拾遺集の例は兄を越えて東宮殿上を果たしたことを言い、枕草子の例は新参者が古参の者をさしおいて出しゃばることを言う。いずれも正当な順序を無視し、逆転して行うことを「さし越えて」という。

したがって、三笠山そのものとしては「山を越える」の意だが、近衛府の異名として用いたときには、少将・中将の順序を飛び越えての意を掛けていると見なければならぬ。

紫式部の返歌「さし越えて入ること難み」云々は、三笠山(近衛府)の麓に入る時は、「同じ麓」とはいえ、少将を「さし越えて」中将から入るのではなく、少将、中将の順に入るべきであるので、まず少将の許を訪れているのです、むしろ私を分け隔てしないあなたのお誘いを待っていたのです、との釈明である。もとよりこの言い方はユーモアであるが、上位に置かれた中将、悪い気はしないであろう。

「さしこえて」がこのような意味を掛けているなら、「さしこみて」の本文は「え」「ミ」の誤写・誤読として処理すべきことである。

### 三 一一三番―助動詞の軽視

かとのまへよりわたるとてうちとけたらんを見むとあるにかき  
つけて返しやる

なをさりのたよりにとはむひとことにうちとけてしもみえしとそお  
もふ

(一一三)

#### 1 問題点

再検討すべきは、詞書の「うちとけたらんを見む」の解釈と、それに連動して歌意が問題になる。特に「とはむひとこと」の部分。

詠歌事情は、男(諸注、宣孝とするが、その根拠は無い)が紫式部の家の前を通り過ぎようとして、「うちとけたらんを見む」と書いてよこした、その紙に「なをさりの」の歌を書き付けて返したのである。

現在の注釈書等は、「うちとけたらんを見む」について次のように説明している。

○「あなたよりもっとうちとけてくれる人と逢いたいのだね」

(人物叢書)

○「昼間の不断着姿が見たいね」(岩波新書)

○かしこまって来客を迎えるような様子ではなく、久しく連れそうた夫を迎えるような、親しく気楽な様子の式部を見たい。(岩波文庫)

○昼か夕方か、明るくて男の訪ねる時刻ではない。男の来る事を予想せず女が打ち解け姿でいるのを見たいと、通りすがりに書いてよこしたので、つっぱねたのである。(評釈)

○不断着で気楽にしているところが見たい。夫を迎える心積りをする夜ではなく、昼のことであろう。(古典集成)

○「もし、心のわだかまりがとけているなら、そのそなたを見よう」と直訳されねばならない(下略)(解釈と論考)

○うちとけたらむを―きちんと身づくろいや化粧をして、来客を迎える時のような堅苦しい態度とは違って、親しい(連れ添う手きた夫を迎えるような)気楽な様子の式部の姿を。なお又、式部が心もちとけて迎えて下さるのを。(全評釈)

○あなたのうちとけた姿が見たいね。ふだん着の姿を、の意で、昼か

夕方のことであろうが、日頃の式部の整いすぎた態度を暗に諷する意もこめるか。(新大系)

○気楽に打ち解けて迎えて下さる姿が見たい。(和歌大系)

「普段着姿が見たい」は、どうやら『岩波新書』『古典集成』の流れのようだ。『全評釈』は『岩波新書』『古典集成』にやや歩み寄っている。『和歌大系』は『岩波文庫』に近い。『人物叢書』は上記のようであるが、『人物叢書』旧版の後に書かれた論文「前渡りについて」では『岩波新書』を考慮したのか、次のように変わっている。ただし、『人物叢書』新装版(昭和六〇年)も訳は旧版のままである。

相手の男は、夫宣孝である。式部の家の前を素通りしてゆく宣孝は「あなたがもっとくつろいで接してくれる時に逢いたくてね」と、言い入れてゆくのだ。式部は直ちに、その文切れの端に「そんないかげんな出来心でやって来る人に、相手かまわずうちとけるなんてできるのですか」と書きつけてしっぺ返しをする。

(今井源衛『紫林照徑』昭和五四年。初出昭和五一年)  
雑誌『国文学』(当該歌担当・秋山虔)は、今井論文・『解釈と論考』などの解が適切だろう、と言う。

現在のところ、〈紫式部の打ち解けた姿・態度を見たい〉と解するのが始どで、それを前提に和歌の「ひとこと」を「人言」と解釈し、男が掛けてきた言葉を指すと理解している。詞書の理解は当然に和歌解釈の前提となるが、詞書の解釈が困難な場合には、和歌から詠歌状況を判断することも必要である。一一三番の場合、詠歌状況理解の決定的要点は和歌の助動詞の用法にある。そこを起点として詞書と和歌の関係を把握すべきなのだが、迂遠ながら詞書の確認から検討を始める。

## 2 「うちとく」の語義

門の前を通り過ぎる男と紫式部との遣り取りを理解するためには、男女間において「うちとく」とはどのような状態を言う語であるかの確認が必要である。まず用例を幾つか示す。

・うちとけたらぬもてなし、髪の下がりば、いとめざましと見たまふ。  
(源氏物語・夕顔 源氏に手を把られた中将の君の様子)  
・むつまじくもなき男に名立ちけるころ、その男のもとより春も立ちぬ、今はうちとけねかし、など言ひて侍りければよめる 下野

(後拾遺集九四三詞書)

・忍びたりし女のまだうちとけぬ許に言ひやりし (高遠集四九詞書)  
・うちとけてもあらぬ人をわりなき所にひきとどめて

(高光集七詞書)

・ほどふれど、いささかうちとけたる御けしきもなく、思はずに憂き宿世なりけりと思ひいり給へるさまのたゆみなきを

(源氏物語・真木柱 髭黒と結ばれて後の玉鬘の様子)

・はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯がひ取りて

(伊勢物語二三段)

男女間における打ち解ける様、打ち解けない様の内容程度は様々で、右のうち源氏物語夕顔の例は源氏の戯れになれなしい応対をしないさま。後拾遺集・高遠集・高光集等は男女関係はあるがまだ心許して馴れるまでには至っていないのであろう。源氏物語真木柱も同じ状態。伊勢物語はすっかり気を許して慎みも忘れたさま。

打ち解ければどのような振舞いになるか、これも様々であろうが、源氏物語浮舟巻には匂兵部卿と小舟で宇治川を渡って過ごしたその翌朝の

さまを

宮もところせき道のほどに、軽らかなるべきほどの御衣どもなり。  
女も脱ぎすべさせたまひてしかば、細やかなる姿つきいとかしげ  
なり。ひきつくるふことなくうちとけたるさま、いと恥づかしく、  
まばゆきまで清らなる人にさし向かひたるよと思へど、紛れむ方な  
し。なつかしきほどなる白きかぎり五つばかり、袖口、裾のほどな  
どまでなまめかしく、色々にあまた重ねたらんよりもをかしう着な  
したり。常に見たまふ人とても、かくまでうちとけたる姿などは見  
ならひたまはぬを、かかるさへぞなほめづらかにをかしう思されけ  
る。  
(新編全集六・一五二頁)

と描いている。初めの傍線部は宮のさま、次の傍線部は浮舟のさま。浮  
舟のさまは、当時としては下着姿。

手づから飯をよそおうのも、下着姿を見せるのも、打ち解けた姿であ  
る。紫式部に声をかけた男の求めは、後拾遺集のような事情だろうか、  
あるいは浮舟的な振舞いであろうか。男は誰か。どのような関係か。そ  
れによっておのずから「打ち解け」の内容は決まるが、それはいま決定  
し難い。ただ、昼間の普段着姿を見たいということではあるまい。

### 3 「を」の存在

さてまた諸注、「うちとけたらんを見む」の部分の解釈、なお明確で  
ない。「を見む」とあるから、「を」で承けるのは見る対象である。

・碁打たせたまふと言ふ。さて向かひむたらむを見ばや、と思ひて、  
やをら歩み出でて  
(源氏物語空蟬 一・一一九頁)

・さやうに思す人こそ一品宮の御方に人二三人まゐらせたまひたなれ。

さて出でたたむを見聞かむ、いとほしくなど

(源氏物語浮舟 六・一七六頁)

等は類似の例である。

したがって今井論文「前渡りについて」が「くつろいで接してくれる  
時に逢いたくてね」と訳すのは誤りである。この訳は「うちとけたらん  
に見む」の訳である。『解釈と論考』の「もし、心のわだかまりがとけ  
ているなら、そなたを見よう」は、「む」を仮定の用法として解釈して  
いるが、その場合でも、「……たらんを見む」であるかぎりには、「もし、  
心のわだかまりがとけているなら、そなたを見よう」ではなくて、「そ  
れを見よう」でなければならぬ。「そなた」という二人称に訳す根拠  
はない。「それを」と「そなたを」では指すところ同じではない。「それ  
を」なら第三者の可能性もありうる。

「を見む」が承けるのは名詞句なので、「うちとけたらん」に名詞を  
補うとすれば、この和歌を入集した玉葉集・恋三(一五五四)に「門の  
前を通るとて、うちとけたるさまを見んと人の申して侍りければ、返事  
に書いて遣はしける」とあるのは可能性の一つで、紫式部のうちとけた  
さまを見たい、の意となる。現在の注の多くも同じ理解である。

しかしながら、それでは「かどよりわたるとて」とうまく整合しない  
し、和歌の「ひとこと」の解釈が困難になる。

### 4 「ひとこと」に宛てる漢字

「門より渡るとて」は「式部の家の前を通って行く」として(和歌  
大系)等の説明のとおり、紫式部の家を目指して来たのではなく、ただ  
通過点として通り過ぎただけである。もともと式部に逢うつもりはない

であろう。いやみな挨拶である。立ち寄る意志のないことは式部にもわかつていたので、和歌で「なをざりのたより」と応じたのである。

その返歌、多くは

いいかげんな通りすがりに訪れるような人の言葉には、心を許してお目にかかることは決してするまいと思っています。(古典集成)

というように解釈されている。『岩波新書』『国文学』『全評釈』『和歌大系』等みな同じ趣旨である。即ち、下句「うちとけてしも見えじとぞ思ふ」の「見えじ」を意志の打消の用法として、式部が「逢うまい」「逢う意志はない」と思っているのだと解釈している。

これでは男の言葉を、仮になおざりにではあっても、紫式部を目指して逢いに来たと理解していることになり、まったく綾のない間の抜けた返歌になる。詞書は後に書かれたものではあるが、「門の前より渡るとて」は、通りすがりであったことを明示した書き方であるから、『古典集成』のような解釈では、詞書の書き方と齟齬をきたす。

なぜこのような解釈になったか。おそらくは第三句「ひとことに」の語義理解を誤った故であろうと思う。諸注の「ひとこと」についての説明をみよう。

○人言に―あなたのお言葉なんかに。(岩波文庫)

○人の言葉。ここは夫の言葉。(古典集成)

○人の言葉の意に、一言の意をかける。(新大系)

○人の言葉。一言に掛ける。(和歌大系)

最近「人言」で落ち着いている。「一言」を掛けるとするのは、おそらく玉葉集(新編国歌大観)が「なほざりのたより」とはん一言に」と漢字を当てていることと無関係ではあるまい。しかしそれよりもなお大きな疑問は「人言」の意に解することである。

「人言」以外の解釈としては、早く『人物叢書』が和歌本文に「人毎」の漢字を当て、

そんないいかげんな序でに女の人を訪ねていらっしやっても、誰だってお望み通りにうち解けてなんかくれるのですか。

と口語訳していた。「見えじ」は打消の推量に解している。

『岩波新書』はこの歌を

いいかげんなついでに訪れる人ごとに心を許して逢うまいと思っています。

と訳し、補足して

宣孝も、式部の家の前を通して他の女のところへ行くのではなく、公務か所用であろう。「なほざりのたよりに訪はむ人ごとに」は宣孝をわざと大勢のなかの一人というふうにあしらったもの。

と言っているので、「人毎」と解しているとわかる。訪れてくる男毎にの意と解しているようだ。「見えじ」は打消の意志に解している。

『人物叢書』と『岩波新書』とでは「じ」の文法的意義の理解が異なるので、歌全体の解釈も異なっているが、「ひとこと」を「人毎」と理解している点だけは一致している。なお、今井「前渡りについて」では、「そんないいかげんな出来心でやって来る人に、相手かまわずうちとけるなんてできるのですか」と訳している。『人物叢書』での訳とは異なって、紫式部を訪れる人毎にと解しているようだ。『岩波新書』の解釈を採用したのである。しかし、この後も『岩波新書』『今井論文』の解釈は後続の注釈書に継承されなかった。珍しい事例である。

これまでの諸解のなかでは、私は『人物叢書』の解釈がよいと考える。そのことを以下に述べる。

## 5 「む」の用法と「ひとこと」の語義

まず「ひとこと」について。

これまでの注釈書等で検討されているように、文脈を無視して「ひとこと」のみを見れば、「人毎」「人言」「一言」を当て得る。

「人毎」は最も早く提唱されたが、いま採用している注釈書はない。『岩波新書』への疑問としては「時には夫以外の男とも逢うけれど、と言わぬばかりに受け取れる」(解釈と論考)「人妻たる者は、人毎になど逢う筈もない」(評釈)等の指摘がある。確かに『岩波新書』の解釈では、なおざりの懸想でなければ誰にでも逢うという含みにもなるので、やはりその解釈は採用しがたい。

「人言」は、人の言葉、すなわち男の言葉と多くの注釈書は解釈している。ただ『解釈と論考』は、「人言」の多くは「世人のうわさ」の意であり、「相手の人の言葉」とされている例は『他人のことば』という一般的な表現でもって、相手の特定の人のことばをおわせた」のである、「人言」を当てるのは無理として、「一言」を提案している。しかし、一般的な「人」の語をもって具体的な「相手」を指す表現(婉曲表現の一種)は、一々例を挙げるまでもなく、和歌ではよく用いられるので、それだけで「人言」を否定することはできない。

むしろ相手(文を贈ってきた男)の言葉と見なし得ない理由は、「とはむひとこと」の「む」にある。助動詞「む」は『日本語文法大辞典』(明治書院平成一三年)によれば、「まだ実現していない事柄や不確かな事柄についてそれが実現することを予想したり、不確かな事柄についてそのあり方を想像したりする意味を表す」とされる(秋本守英執筆)。いま問題にしているこの「む」はいわゆる仮定・婉曲の用法とみなさ

れるが、「人言」が詞書の「打ち解けたらんを見む」を指していると解するときは、その言葉は紫式部に向けて発せられ、文として式部の手許に在るのだから、それを承けた返答としては「とへる人言」「とひし人言」とでもあるべきで、「実現していない」或いは「不確かな」事柄を表す助動詞である「む」を用いるのは不自然である。それは「一言」であっても同じである。「ひとこと」を「言」と解するかぎり、そしてそれは「うちとけたらんを見む」を指すのだとするかぎり、「む」との不整合はまぬかれがたい。

『岩波新書』の解釈は「む」との整合性はよい。或いはそれが解釈の根拠だったのかもしれない。だが、前述の理由で採用できない。そうすると、「む」とも矛盾しない解釈は『人物叢書』のそれである。いま一度その口語訳を示す。

そんないいかげんな序でに女の人を訪ねていらっしやっても、誰だっってお望み通りにうち解けてなんかくれるのですか。

傍線部分が「とはん人毎に」の訳に当たる。(訪ねるであろうひとひとごとと皆)へもし訪う(声をかける)たらそのひとひとごとと皆の意を右のように意識したのであらう。「人」は門前を通る男ではなく、その男から声を掛けられるのであらう別の女である。「む」を仮定・婉曲の用法として解釈すれば、このように解するのが最も穩当である。「なほざりのたよりにとはん人毎に」という言い方の中に、なおざりにのたよりに声を掛けられたと認識している紫式部自身をもおのずから含めているであらう。

上句をそのように理解すれば、下句の「見えじ」の「じ」も「心を許してお目にかかることは決してするまい」(古典集成)という打消の意志ではなくて、「心ゆるしては逢わないだろうと思いますよ」と打消の

推量で解するのがよいであろう。

## 6 返歌の意味

詞書に戻る。和歌の「とはむ人ごと」が、表現として（男が実際に別の女の許に行く途中であったかどうかは確定できないが、紫式部はその途中のこととして応じたのである）これから男が訪れようとしている女を指しているとすれば、紫式部は「打ち解けたらんを見む」を「打ち解けているような人に逢おうと思う」の意にとったのだと解し得よう。「打ち解く」の語義等、前に検討したところと矛盾はない。『人物叢書』の「あなたよりもっとうちとけてくれる人と逢いたいのね」の訳でまずまずよかったのである。しかしそれにしても、今井先生御自身が後に『岩波新書』の解釈を採用してしまったのは、何とも残念である。

さて、紫式部の返答を砕いて言えば、男の多情をからかって、「わたしはもちろんですけど、いい加減に何かのついでに声を掛けるようなことでは、あなたが声を掛けたとしても女は皆誰も打ち解けては逢うまいと思いますよ」と突きはなしたといったところであろうか。

紫式部は男からの文に返歌を書き付けて返したのだから、その紙には男からの和歌が書かれていたであろう。その和歌がどのような内容であったか。要約すれば「うちとけたらんを見む」であるのか。それとも式部への何か恨みの歌があって、更に「うちとけたらんを見む」と補足されていたのか。おそらくは後者かと想像するが、それ以上の想像はむづかしいし、あまり意味もない。

相手の男は誰か。注釈書の多くは、夫の宣孝であるとしているが、これも根拠があるわけでもない。これまでの注釈書、議論なく男はみな宣

孝とする。しかし、式部からつれなくされたことのある多情な男がちょっと声を掛けてきていたのだと解しても、どこにも矛盾はない。

## 四 一一六番―見るほどに時雨に曇る空

しくれする日こそ少将のきみさとより  
くまもなくなかむるそらもかきくらしいかにしのふるしくれならむ

返し

ことはりのしくれのそらはくもまあれとなかむるそてそかはく世もなき  
(一一六・一一七)

## 1 問題点

この贈答歌の問題点は贈歌の上句、特に「くまもなく」にある。「くまもなく」には本文異同がある。実践女子大学本と同じ定家本系統である三条西家本・松平文庫本等を始め古本系の陽明文庫本（日記歌として巻末収載されている）も含めて、多くの伝本は「くもまなく」とする。紫式部日記もやはり「くもまなく」である。和歌の他の箇所には歌意に関わるような本文異同はない。

陽明文庫本を底本とする『古典集成』『新大系』は当然に「雲間無く」の意で解釈している。また実践女子大学本を底本とする『岩波文庫』も、

「雲間無く」の本文を採る。雲の絶え間もなく（↓かきくらし）と、間無く（絶間なく・ひまなく↓ながむる）の懸詞。



との注を付している。この掛詞の指摘も『古典集成』『新大系』『和歌大系』みな同じである。なおまた『国文学』『和歌大系』も底本は実践女子大学本だが、「雲間無く」と本文を改訂している。

一首の歌意は諸注ほぼ同じで、例えば『古典集成』の口語訳は次のようである。

たえまなくもの思いに沈んで眺めている空をも、雲の切れ目もなくまっくらにして降るのは、今までどれほどこらえていた時雨なのでしょう。それはあなたが恋しくてたえきれない涙のようです。

紫式部日記（行幸ちかくなりての段）の本文も「くもまなく」だからそれで問題はないごとくだが、その本文では「かきくらし」とうち合わない。雲間なくふさがっている空が急に暗くなって時雨が降るというのでは、いかにもおかしい。それ故か、『岩波文庫』は「くもまなく」を「かきくらし」に掛かるとしている。口語訳から察するに『国文学』『古典集成』等もそのように解しているのであろう。しかし、「雲間無く」の句全体は「かきくらし」に係り、掛詞部分の「間無く」だけが「ながむる」に掛かると考える（古典集成の口語訳はそう理解できる）のは不自然である。和歌における時雨の詠み方とも齟齬をきたす。

結論を先に言えば、初句は実践女子大学本の「くもまなく」がよいと考える。そのことを以下に述べる。

## 2 時雨は晴雨定まらず降る

まず時雨の降り方から確認しよう。時雨は和名抄に「孫愔曰、霽雨、小雨也。漢抄云、之久礼」とあるが、和歌における時雨は、古今・後撰集あたりでは野山の木の葉を紅葉させるものとして詠むのがほとんどで、

雨の降り方そのものはあまり詠まれない。拾遺集時代からすこしづつ時雨そのものを詠む歌が増えてくる。

時雨の降り方は、にわかにはサーと降り始めいつの間にか止んで空は晴れている。そのように晴雨定まらないのが特徴である。そのような時雨の和歌を挙げる。

神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の始めなりける

（後撰集四四五読人不知）

千早振 神無月とや 今日よりは 曇りもあへず 初時雨 もみち  
とともに ふるさとの ……

（古今和歌六帖二五〇七）

思はずに時雨の雨は降りたれど天雲晴れて月夜清きを

（人丸集一三四・万葉集二二二七）

世の中になほもふるかな時雨する雲間の月の出づやと思へば

（和泉式部集六三）

定めなき空にもあるかな見るほどに時雨にくもる冬の夜の月

（頼実集七一。月夜の時雨）

あやにくに時雨くらせど名にたかき今宵の月はくもらざりけり

（伊勢大輔集三八。九月十三夜、時雨はしながら月の明かりければ）

名残なく時雨の空は晴れぬれどまだ降るものは木の葉なりけり

（詞花集一三五源俊頼）

今はとて寝なましものを時雨つる空とも見えず澄める月かな

（新古今集六〇〇良暹）

ただし、一方では、時雨が降り続くと詠むものもある。

時雨の雨間なくし降れば真木の葉もあらそひかねて色づきにけり

（万葉集二一九六・古今六帖四九四）

雲間なき時雨の秋は人こふる心のうちもかきくらしけり

（落窪物語巻一。時雨いたくする日に姫に贈った少将の歌）

実際の時雨の降り方は様々であろうから、詠歌時の状況に応じて落窪物語のような詠み方もするが、平安時代は、特に中期以降は「降りみ降らずみ定めなき」ものとしてよむものが多い。頼実集の「月夜の時雨」のように月夜の空が見る見るうちに曇って降り出す、あるいは逆に伊勢大輔集のように時雨の空にいつのまにか月が出ている、と詠む。

### 3 詠歌時の天候

では紫式部集はどうか。その詞書は「時雨のする日」とあるのみだが、紫式部日記ではこの贈答の前にさらに消息の往来があったことがわかる。その記事には

小少将の君の文おこせたる返りごと書くに、時雨のさとかきくらすば、使も急ぐ。（中略）暗うなりたるに、立ちかへり、いたうかすめたる濃染紙に（雲間なく……）返し（ことわりの……）

とある。小少将の君から文があり、その返事を書いている時に時雨がサーと降り出した。使者が返りを急ぐので、式部は時雨にちなむ「腰折れ」を詠んで渡した。その歌は日記にも家集にも記されていない。暗くなった頃に小少将からの和歌が来た。それが「くまもなく（くもまなく）」の和歌である。

紫式部日記を見るに、最初の小少将の君から文があった時にはまだ時雨はしていなかったであろう。急に時雨の気配がしてきた、それが「時雨のさとかきくらすば」ということである。小少将の再度の文の時にはやはり時雨は止んでいたであろう。それが式部の返歌の「ことわりの時雨の空は雲間あれど」に反映していると見なしうる。

「雲間無く」とする本文で詠歌時の天候を復元すると、「雲間なく」

眺めている空が「かき曇り」時雨が降り出したというのであるから、これでは雲の切れ間がないほど曇っていた空が更に一面に曇ったことになり、おかしい。そのおかしさを避けるために、「雲間なく眺むる空もかきくらし」という言葉の続きを「間なく・眺むる空も」「雲間なく・かきくらし」と解釈するのは、言葉の掛かり受けが不自然である。

実践女子大学本のままに「くまもなく」で解釈すれば、隈もなく眺むる空―陰りなしと眺めていた空をかき曇らせて、の意となる。この方が和歌における時雨の空の扱いとも矛盾なく、晴れていた空をかき曇らせて時雨が降り出したことになり、表現としても、雲間なき空（雲の絶え間のない空）をかき曇らせてというよりはずっと良い。「かきくらし」はいわゆる他動詞であるから、空をかき曇らせて降るには、初めから雲間なき空ではまともな表現にならないのである。

### 4 「くまもなく」が合理的な本文

紫式部日記の本文は前述のとおり「くもまなく」だが、紫式部日記絵巻の絵詞は「くもりなく」とある。萩谷朴『紫式部日記全注釈』は「ま（末）」「り（里）」の字形相似による本文転化と見なして「くもまなく」に従っている。実践女子大学本の「くまもなく」と絵詞の「くもりなく」とは、意味するところはほぼ同じだが、本文的に直截の関係があるようでもない。しかし、「くもりなく」の方が意味がよく通じることが確かである。

時雨の降り方、天候の変化と和歌本文の整合性等を考慮すれば、実践女子大学本の「くまもなくがむるそら」の方が然るべき本文であるよ

うに思われる。「くもまなく」と「くまもなく」とは「もま」「まも」の誤写・誤視、あるいは返歌の「雲間あれど」に引かれて「雲間なく」と誤ったのかもしれない。

紫式部の返歌に関しては特に言うべきことはない。「ことわりの時雨の空は雲間あれど」は、前述の通り、時雨の晴雨定め無きさまを踏まえての表現である。

なお贈歌の下句の解釈にもやや疑問が残されている。時雨の比喻（誰の涙か）が贈歌と答歌とでは転換されているのではないかと思うのだが、それは日記には記載されていない紫式部の「腰折れ」の内容と連動することだから、いまその想像はこれ以上はしないでおく。

## 五 一二三番左注―公言と公事

すまひ御らんする日内にて

たつきなきたひのそらなるすまゐをはあめもよにとふ人もあらしな返し

いとむ人あまたきこゆるもゝしきのすまゐうしとはおもひしるやは

あめふりてその日は御らんとまりにけりあいなのおほやけこ

とゝもや (一一一・一二二)

## 1 問題点

相撲節の天皇御覧の日に内裏で交わされた贈答である。この贈答は相撲節という公事と紫式部の心中の憂いとを重ね合わせた和歌であると理解されている。たとえば『古典集成』の訳を示せば次のようである。

家から遠く離れてよるべのない力士同様に、さびしい宮中の私の所へ、今夜の雨の中を訪ねて来てくれる人はまさかないでしようね。

(一一一)

宮中では相撲を競う人がたくさんいるとのことですが、同様に張合う人がたくさんいるという宮中の生活は、住みづらいものとおわかりになりましたか。

(一二二)

左注の「雨降りて、その日は御覧止まりにけり」は、雨で相撲御覧が中止されたことをいうが、寛弘四年八月十八日の臨時相撲が雨で延期になっているので、その折のことだろう考えられている（全評釈）。

「あいなのおほやけごとどもや」は

○つまらない公事であったことよ。（評釈）

○あれこれとつまらない公事であったよ。（古典集成）

○ほんに、ままならぬ公事どもですこと。（全評釈）

などに訳され、「おほやけごと」を「公事」とすることは一致している。ところが、『解釈と論考』は、「あいなのおほやけごと」を「まったく不本意な公事」とするのはおおよそ同じだが、末尾の「とまや」について

諸家「どもや」と読むが、「ども」と複数に読んでは、意味をなさない。《とまや》と清んで読んで、”とも言うべきであろうか“の意に解すべきである。

と異見を提出している。

この異見はその後の注釈書にも採用されていないが、『ども』と読んでは、意味をなさない」という指摘は重要である。「公事ども」は複数の公事を言うから、相撲以外の何をもって複数としたのかを問題にしなければならぬ。しかし、注釈書の訳に「ども」を訳出しているものは

ない。『全評釈』は語注で「どもは、体言に接し、同類のものの複数を示す語。やは詠嘆の助詞」とは説明しているが、口語訳は上記のとおり「公事ども」とするのみである。

では、『解釈と論考』の説を採るべきであろうか。それも落ち着かない。もう一度白紙から再検討する必要があるようだ。

## 2 「おほやけこと」の語義

「おほやけこと」の意味を考えて漢字を当てれば、「公事」の他にも「公言」が考え得る。「公言」は公的な発言、公的な立場での物言い、という意味である。

「おほやけごと」の用例を一、二挙げる。

源氏物語夕顔巻、源氏が六条御息所の許から朝出し、廊の隅で女房中将の君に戯れかかるくだり

咲く花にうつるてふ名はつめども折らで過ぎうきけさの朝顔  
いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと慣れて、とく、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

と、おほやけごとにぞ聞えなす。 (新編全集 一・一四八頁)

これは源氏の和歌を自分に詠み掛けられた私的恋愛の歌として受け取らず、御息所家に仕える女房としての立場で返したのであるが、その詠みようを「ことさらに〈おほやけ言〉として返歌もうしあげた」という。紫式部集にも用例がある。道長の土御門殿での法華三十講の第五巻がちょうど寛弘五年五月五日に当たった折の詠歌である。

その夜、池のかがり火に、御あかしの光り合ひて、昼よりも底までさやかなるに、菖蒲の香、いまめかしう匂ひくれば、

かがり火の影もさわがぬ池水に幾千代すまむ法の光ぞ (六七)

おほやけごとに言ひ紛らはすを、向ひたまへる人は、さしも思ふことものしたまふまじきかたち、ありさま、よはひのほどを、  
いたう心深げに思ひ乱れて

澄める池の底まで照らす篝火のまばゆきまでも憂き我が身かな

(六八)

六八番の詠者は紫式部日記により大納言君と判明している。「おほやけごとに言ひ紛らはす」とは、法華三十講の場での詠歌のさいに、私的な感情でなく、中宮に仕える女房が主家の慶事を讃える立場で詠んだことをいう。通り一遍の讃歌でお茶を濁したことを「言ひ紛らはす」と言ったであろう。それに対して大納言君の歌は、法華三十講の篝火を素材としながらも自分自身の憂悶を詠じている。式部の「おほやけごと」とは対照的な詠み方である。

## 3 おほやけ言の和歌

これから察するに、一二三左注の「おほやけごと」も公言であろう。内裏にあって、雨があがり相撲御覧が行われるのを期待しつつ、雨の夜の相撲(相撲人)を題材に詠み合った、それがこの贈答ではなからうか。ところが、そのまま相撲御覧は中止になった。それで、相撲人を題材にした和歌も、実際の相撲御覧がなければ、間の抜けた無駄な詠歌である。それを「あいなおほやけごと」と言ったのであろう。「ども」と複数であるのは、複数の和歌を指している。

このように考えると、「公事」では説明がつかなかった「ども」の使用が初めて説明できる。「あいなし」という否定的意味を持つ語が「お

ほやけごと」を修飾しているのとも矛盾しない。

相撲御覧を期待しつつ、内裏にあって、相撲人を題材として詠んだおほやけ言の和歌だとして解釈すれば、一二一は、よるべない旅の空にある相撲人を雨の中にまさか訪ねる人はいないでしょうよ、の意。相撲人の孤独を詠んだもの。一二二は、国許では力自慢として自信満々だっただろうが、挑みあう相撲人の多く集まっていると聞いているこの宮中は相撲人には住みにくく、相撲人とは憂きものだと思いつたのだろうか、の意。負け相撲の不安を思いつたもの。

この贈答が「おほやけ言」として詠まれたとすれば、従来の注釈書が、訪れる者のいない寂しさ、女房達の競い合う憂き心など、紫式部たちの私的憂愁の感情を読み取ろうとするのは、左注の補足に背反する。相撲人に関するのみの和歌とすべきである。

## 六 おわりに

ここに取り上げた四首の和歌について言えば、いずれも鍵になる言葉の語義の検討が不十分であったと思う。「さしこえ」「うちとけ」「おほやけごと」等の語義を用例を含めて慎重に検討すべきであった。「時雨」も和歌の用例を見れば、或いは具体的に景色を想像すれば、本文の不合理性に気づいたであろう。

文法的意義の確認も怠せにできない。「とはむ」の「む」の文法的意義に留意すれば、何故に『人物叢書』や『岩波新書』があのような口語訳をしたかにも注意が向いたのではなからうか。そうすれば、『人物叢書』の解釈が見直されたはずなのだが。

紫式部集の注釈は全面的再検討を必要としており、それは着実に蓄積

されつつあるが、なお最近に至っても『岩波新書』の紫式部集理解・解釈の枠組をそのまま踏襲した著書論文が刊行されたりもしているのは残念なことである。紫式部集は私家集としては比較的多くの注釈書が備わっているが、それらの注釈書の解釈が一致していても安心できない。それらはみな基本のところと同じ方向を向いているからである。

紫式部集を用いて何かを書くとする場合、先行注釈書等を参考にするのは当然為さねばならない手続きであるが、また同時にそれらの注釈書等の解釈を疑ってみることも為さねばならない手続きである。それは、語義の丁寧な検討と文法的事項への留意、そのための類例の収集という、解釈のさいの基本手順の実践である。そしてそのさいに大事なことは、岡一男氏（源氏物語の基礎的研究）清水好子氏（岩波新書）によって形成された紫式部集についての先入観を取り去って、直に紫式部集に向き合うことである。拙稿「紫式部集解釈のあゆみ」にも書いたことだが、「それは本文のどこに書かれていますか」という問に答えられない解釈は、みな疑わなければならない。

本稿は平成十八年度前期に演習で扱った和歌の中から問題とすべき箇所を拾い上げた。その範囲の中でもこの他に問題とすべき和歌は少なくない。誤りではあるがあまりに小さな箇所、また明確な解決案が見いだせない箇所については、ここに取り上げなかった。いずれそれらも検討する機会を得たいと思う。

## 注

「紫式部集一・二番歌について―解釈、伝記、説の継承―」

（『福岡教育大学紀要』四七号、平成一〇年）

「紫式部集四・二八番歌の解釈―伝記資料として読む前に―」

〔『文学・語学』一六二号、平成一年〕

\* 右の二編は『平安朝和歌漢詩文新考 継承と批判』（風間書房、平成二年）に収録。

〔紫式部集注釈不審の条々―宣孝関係とされる歌―〕

〔『福岡教育大学紀要』五二号、平成十五年〕

〔紫式部集解釈のあゆみ―五五・五六番歌を例として―〕

〔『國文學』學燈社、平成一七年四月号〕